

6 【おいがかり】

ぼくはよく、夜中におつかいを、たのまれたものです。

夜中におつかいをたのむ親なんか、いまの時代にはいないでしょうが、あのころの親は、夜中であれ、何であれ、こどもにおつかいをたのんだものです。

ぼくは、いつも悪さをすることでもでしたから、悪さをした夜は、おつかいをたのまれることを、覚悟（かくご）していました。

ほかの家のこどもは、悪さをすると、かならず折檻（せっかん）されたものですが、ぼくの母親は、折檻するだけの気力と体力を、もちあわせていなかったのです。

それでたびたび、おばけに遭遇（そうぐう）することになるのです。

街灯もない、月の光と狐火（きつねび）だけがたよりの、夜道を歩いていると、うしろからおそってくる気がする。

気がするだけではなく、ほんのたまにおそってくる。

ぼくは、うしろから手をおさえつけられる。

おさえつけてくる相手の手は、手というほど、かわいらしいものではない。

〈手〉を百くらい、くくった漢字があるとしたなら、それです。

ぼくが強く握りしめている、おつかいの百円が、ほしいのだろう。

わざと、ぼくは手をひらく。

百円が、地面におちる音がある。

そしてぼくは解放（かいほう）される。

いくらさがしても、百円はみつからない。

ぼくは、母親への言いわけを、かんがえたものです。

しかし母親は、言いわけなんかしなくとも、しかつたりはしませんでした。

ただ百円は、家計（かけい）にとって小さくはない。

そういうときは、翌朝の食卓には、何もでません。

ぼくは水だけを飲んで、学校にいったのです。

帰りに、懐爺のところによりました。

「あいつはおばけじゃなく、かっぱらいじゃろ」

ぼくは懐爺にききました。

「かっぱらいなら、そんな面倒（めんどろ）なことをしませんよ。刀かなんかつきつけて、金ちゃんをおどして、金をだせってやりますよ」

「だば、やっぱしおばけか」

ぼくは納得（なっとく）しました。

「【おいがかり】というおばけです。その仲間で、【かぶせ】とって、毛布や布団をかぶせてくるおばけもいますよ」

「おそろしいのう」

ぼくはふるえました。

「でも金ちゃんは男の子だから、【おいがかり】は、かぶせたりはしません。もし女の子なら、【おいがかり】は、かぶせてお金よりも大事なものをうばいます」

「それは、なんじゃい」

「金ちゃんがおとなになったら、わかります」

懐爺は、真面目くさった顔でいいました。

「だば、そんなこといわんでええ」

こどもだけれども、ぼくにはわかっていました。

「そろそろ【おいがかり】がでる時刻（じこく）ですよ。【おいがかり】がでなくとも、【べとべとさん】がでるかもしれません。うしろで足音がしたら、きっと【べとべとさん】ですから、そのばあいは、べとべとさん先へおこし、というんですよ。そうすると足音は消えますから。さあ帰らないといけません。もうれつに走って帰れば、【おいがかり】も【べとべとさん】も、でてはきませんよ」

たしかに、黄昏（たそがれ）が終わって、闇がおりてきている。

「ほんまじゃ、さいなら」

ぼくは、家へ向かって、一目散（いちもくさん）に走りました。